



「新世紀の歌」の成り立ち

広布に駆ける雄大さと力強さにあふれる「新世紀の歌」は、1961年（昭和36年）11月20日、東北本部落成式の席上、「東北健児の歌」として誕生した。

この歌の誕生からさかのぼること半年、61年（昭和36年）5月に福島郡山を訪問した第三代会長池田大作先生は、「東北の新しい旅立ちの誓いを込めて、皆で“東北健児の歌”を歌おう！」と東北の新出発のために新しい歌の作成を提案。2か月後の7月、東北青年部総会に出席した池田先生は、改めて男子部幹部に、歌づくりについて尋ね激励した。

この時決意を新たにした青年たちが中心となり、作成委員会が結成され、同年11月20日の東北本部落成式での発表を目指して歌詞が公募されることとなった。

だが、公募の締め切りが迫っても、みなが納得できるような歌詞はなかなか集まらなかった。

完成目標としていた東北本部落成式まで1か月を切った10月下旬、東北大学に通う学生部員が作成した歌詞をもとに本格的な作詞を開始。さらに発表の1週間前に宮城の男子部が自ら、作曲した楽譜を持ち込み、発表の3日前に「東北健児の歌」は完成した。

世界広布の大空に飛び立つ空飛ぶ者の王“鷲”。地走る者の王“獅子”の雄叫び。そして、57年（昭和32年）の年頭に第二代会長戸田先生が詠んだ「荒海の鯨にも似たる若人の広布の集い頼もしくぞある」との歌から“荒海と鯨”が歌い込まれた。

11月20日、東北本部落成式の最後に合唱された「東北健児の歌」を聞いた池田先生は、「いい歌だ。東北も明るくなったね！」と。そして「この歌を東北だけでなく、日本国中で歌っていきたいと思うが、どうだろうか」との提案に賛同と歓喜の拍手が巻き起こった。

さらに落成式終了後の懇談会の席で、歌詞の一部に手を加えた池田先生は「この歌は全国の同志が歌っていくのだから『新世紀の歌』としてはどうだろうか」と再び提案。こうして「新世紀の歌」が誕生し、日本中に広まっていったのである。

青年たちが「新世紀の歌」を合唱するとき、練習の苦労も、つらかったことも、宿命との戦いもすべて歓喜に変わっていった。

「若鷲」「鯨」「師子王」に託された青年の心意気あふれる「新世紀の歌」。師の心を受け継いで、新しき世紀へ、新しき世界へと雄飛していこうとの青年たちの力強い歌声が聞こえてくる。

